

私を支えた『論語』の言葉

株サンレー
社長

佐久間庸和
さくま つねかず

私は、三十八歳で社長に就任しました。わが社は、ホテルや冠婚葬祭などのサービス業を営む会社です。無我夢中で社長業に取り組んできましたが、当時の私はどうにも割り切れない思いを抱えていました。

お客様に最高のサービスを提供するというホスピタリティ・マインドの追求と、企業としての利益追求の両立に悩んでいたのです。悶々とするうちに、すぐ三十九歳になりました。四十歳の大台まであと一年です。四十歳といえば「不惑」ですが、迷ってばかりいる私は、「不惑」の出典が『論語』であることを思い出し、『論語』を四〇回通読することを自身に課しました。すると、不思議なことに本当に迷わなくなりました。

一般的に企業とは、利益を追求する存在であるとされています。では、利益とは何か。

「利」という言葉は『論語』にも登場します。

「利によりて行えば怨み多し」（行動がつねに利益と結びついている人間は、人の恨みを買うばかりである）

「君子は義に喩り、小人は利に喩る」（君子はまつさきに義を考えるが、小人はまつさきに利を考える）

孔子は、「完成された人間とは」と問われて、「目の前に利益がぶら下がっていても義を踏みはずさない」ことを、その条件の一つに挙げています。どうも、「利」と「義」はセットで語られてきたようです。そう、経済と道徳は両立するのです。

多くの賢人たちがするように訴えてきました。『国富論』を書いたアダム・スミスも、『道徳感情論』という著書でそのことを訴えています。日本では、石門心学開祖の石田梅岩や『論語と算盤』という著書で有名な渋沢栄一がいました。

やはり、「利の元は義」であると、私は確信します。自分の仕事に対する社会的責任を感じ、社会的必要性を信じていることができれば、あとはどうやってその仕事を効率的にやるかを考え、利益を出せばよい。そのように悟ったら、迷いはきれいに消えました。